

## 父、有賀鐵太郎への想い

有賀誠 一

カナダから参りました有賀誠一です。父、有賀鐵太郎について話すようにとお誘いを受けましたので、父と母から直接聞いたことを中心に話を進めたいと思いますが、その前に、鐵太郎の両親、私たちの祖父母について簡単に触れておきたいと思えます。

鐵太郎の父親である有賀文八郎は明治元（一八六八）年に福島県の寒村に生まれ、村の小学校の教員をしていた二十歳ごろにクリスチャンになり、数年後に東京へ出て実業界に入りました。そこで、栃木県出身の、すでにクリスチャンであった市澤仲と結婚したのですが、その二年後、貿易使節団の副団長としてインドへ派遣された一八九四年にイスラム教に触れてイスラム教徒になり、それ以後、昭和二十一（一九四六）年に永眠するまで有賀阿馬土と称し、神戸のムスク建設の発起人になったり、『イスラーム教祖 聖ムハムマッド小傳』を著作出版したり、『聖香蘭経』を翻訳出版したりと、信徒布教師として熱心にイスラム教の布教に努めておりました。父が生まれたのは明治三十二（一八九九）年ですので、祖父はすでにイスラム教徒になっていたわけですが、クリスチャンの妻に改宗を迫ることもなく、自分の子供達を近くのキリスト教の日曜学校に通わせるというほどの自由主義者でした。それで、鐵太郎は子供

の頃から原宿同胞教会、現在の日本基督教団原宿教会の日曜学校に通っておりました。

本人も言っていました、幼年期、少年期の鐵太郎は神経質で大変な痲癩持ちだったそうです。しかし、痲癩はともかく、神経質だったということは、自然や人間に対する感受性が人一倍強かったということでもあったわけで、私がお偶然見つけた、父が小学校低学年のときに書いた作文に、「お客様がこられたので、ご挨拶し、そのあとちよつと庭を眺めて、部屋に戻りました」というようなことが書いてあり、父に「『ちよつと庭を眺めて』とはどういふこと？」と尋ねたところ、「ははは。それは、おそらく庭の草木に目を引かれたからだろうね」という答えでした。自然に対する感受性が強かったからこそ、そんな作文を書いたのでしょうか。

鐵太郎が絵をかいていたことをご存じの方もおられるかと思えます。何歳ごろから絵をかき始めたのか私は知りませんが、現在私たちの手元に残っている三百枚以上の絵画の中に、十二歳のときの油絵が残っています。十四歳のときに姉や妹をかいた水彩の肖像画や、十五歳のときにかいた油絵の自画像などは、すでに素人のレベルを超えていますから、希望すれば、数年後にはどこの美術大学でも入学できたと思います。事実、父は本気で画家になりたいと思つて真剣に努力していたそうです。人間と自然に対する感受性が強かつただけに、鐵太郎は（自画像を含む）肖像画と、立木や林などを中心とした風景画を描くことに情熱を感じていたようです。このことは、本人が意識しないままに、自然と人間の存在の意味は何かという命題を、絵画を通して模索し始めていた、と言えるのではないのでしょうか。画家になりたいという希望を強く持っていた鐵太郎でしたが、実業界で騙されたり訴訟されたりした経験のある父親は、息子が将来東大の法科に進み、弁護士になって自分の事業を助けてくれることを期待していたので、当時東京府立第一中学校（一中）の生徒だった鐵太郎もそのつもりで勉強していたようです。「一高、東大へ行けるだけの成

績はとっていたよ」と言っていました。一番や二番というほど上位の成績ではなかったようです。

欧州戦争が始まったとき（一九一四年）鐵太郎は十五歳でしたが、「戦争は愛の行為である」と言う牧師の説明に納得できず、さりとて他の説明にもたどり着けず、悶々として日を過ごしたそうです。そして十六歳の時には、お腹がパンパンに腫れ上がる病気にかかり、「生まれて初めて、僕は死ぬのだ、と感じた」そうです。掛り付けの医者か「頼りなくて、適切な治療をしてくれなかった」ので、激痛は一月近く続き、ついに日赤病院に入院したところ、診察した外科医（軍医大佐）は、これは「盲腸炎が化膿して破裂し、その膿が下腹部にあるドーグラス氏孔に流れ込んでひどい腹膜炎を引き起こしたのだ」と喝破して、父の言葉を借りると「すぐに肛門を太刀割って」洗面器が一杯になるほどの膿を取り出してくれました。「膿が出て行くと同時に痛みがスーッと消えてね。ああ、僕は生きかえったんだ、と感じたよ。貴重な経験だった」と父は語ってくれました。

この生死の境をさまよう出来事は、ただでさえ感受性の強かった鐵太郎に、「死とは何か、生とは何か」という実存的命題を真正面から突きつけたわけで、「暗黒の中に我は道を失へり。一九一五年十一月二日」と題した、黒鉛筆で描かれた小さな自画像には、妖気が漂っていると言えるほど強烈な、彼の苦悩がにじみ出ています。

それまでは絵画を通して自然と人間の存在の意味を模索していた鐵太郎でしたが、この病を通して「神様のことをもっと知りたい」という願望が急激に強くなり、一中を卒業する直前に洗礼を受け、画家になる夢を捨て、法律家になつてほしいという父親の期待にも逆らい、一高東大へ進む同級生の誰にも告げずに（落伍者になるようで、恥ずかしかったそうです）、こっそりと同志社神学部に入學しました。同志社大学に入學してビックリしたのは、同志社中学から上がってきた同級生らが英語をペラペラと喋ることだったそうです。最初は彼らの雄弁に圧倒されたのですが、

注意して聞いていると、彼らを使う語彙や文法はいい加減だとわかってきたので、それ以後は、同志社の同級生ではなく、一中時代の同級生を常に意識し、彼らを基準にして勉強に励んだそうです。実際のところ、一中時代の彼の同級生には、旧約学者の浅野順一、経済学者の斎藤茂夫、ノーベル化学賞を受賞した水島三一郎、第一生命社長の矢野一郎、住友銀行頭取の松本三郎、大阪ガス専務の浅田一彦など、後に学会財界に重きをなすことになった秀才がずらりと並んでいましたから、どこかノンビリしたところがある同志社の同級生相手では張り合いがなかったのでしょうか。それでも父は同志社をこよなく愛し、創立者新島襄の教育理念を高く評価し、同志社出身の私どもの母と結婚し、私たち娘や息子を全員同志社に入れてくれました。今も私たちはそのことを心から感謝し、同志社人としての誇りを父母と共有しております。

神学部一年生の夏休みには、文系の学生である鐵太郎には必要のなかった代数の教科書を手に入れて、「自己鍛錬のために」その演習問題を片っ端から解いていったそうですが、論理の破綻を許さない数学というものに挑戦することによって、ともすれば論理的に曖昧になりがちな神学や哲学を、より厳密な学問へと成長させる手がかりを得たようです。画家になる夢を捨てて同志社の神学部に入学したので、一旦は絵の道具も（文字通りに）捨ててしまったそうですが、「最初の夏休みの終わり頃に、どうしても我慢しきれなくなって、また絵の具や絵筆を買ってきて、かきはじめた」そうです。代数の演習問題を解くのに明け暮れた夏休みでしたが、それは、彼の論理性を養うことにはなっても、彼の心の問題（信仰、神と自己の存在の意味や意義という命題）を解く鍵にはならなかったからでしょう。言い換えれば、彼自身の存在の根底に、絵画というものが深く根を張っていたのです。神学生時代にかいた鐵太郎の絵（コロンテでかいた白黒のものから、水彩や油絵のものまで、多数残っています）の中には、素直で綺麗にかかれた、素人

受ける絵も少しはありますが、その大半は、どちらかというとき重苦しい感じのもので、そのどれにも、彼の想いというか、心の中の葛藤、解決できない永遠の実存的命題というようなものが表現されていると私は感じております。

これはずっと後になってからのことですが、私が大学生の頃に、父がその五年前、五十五歳だった一九五四年にニューヨークでかいた、普通の食卓椅子が部屋の壁の前に一つポツンと置かれているという、平凡な感じの水彩画について父が説明してくれたことがあります。父は、「実は、僕がこれをかいていたときは、何をかきたくて、これがかいていたか、自分でもわかっていたが、いまこれを見て、僕が本当にかきたかったものがなんだったか、わかったよ。この影がかきたかったんだ！」と、嬉しそうに、その影の部分を指差して言うのです。それまで、なんの変哲もない食卓椅子にだけに注目して、「大した絵ではないな」と思っていた私にとっても、まさに「目から鱗」でした。父が本心から追い求めていたものは、「美しい絵」を求める審美主義でも耽美主義でも無く、また、目に見え、触れることのできる対象物を分析描写する写実主義でも無く、つかみどころのない、それにもかかわらずその物体から離れることなく厳然と存在している「影」そのものであったのです。十代二十代の時にかいた、お化けを思わせるような樹木の油絵にも、五十代になってかいた水彩画にも、父の思想と信仰が「影」として表現されているのだと、新たな感激をもってながめております。

話を一九二一年に戻しましょう。神学部卒業の直前に父は総長室に呼び出されました。「何も悪いことをした覚えはないが、叱られるのだろうか？」と恐る恐る総長室に入ってきた父に向かって海老名正総長は「有賀君、君は本学始まって以来の優等生、オールA+の学生だ。すぐにアメリカの大学院へ留学しなさい」と宣告されたそうで、それを受けて父はニューヨークのユニオン神学校のマッジファルト教授のもとで教会史と教理史を学び、修士号を得て

母校同志社で教えることになりました。それから十年後に父は再びユニオン神学校に行き、オリゲネスを中心に初代教父について研究し、神学博士(D. D.)の学位をえて同志社に戻りました。未っ子の私が生まれる三年前のことです。満州事變の発端となった柳条湖事件(一九三一年)、帝国陸軍青年将校らによるクーデター(二二六事件、一九三六年)、シナ事變の発端となった盧溝橋事件(一九三七年)などが相次いで発生し、日独伊防共協定(一九三一年)から日独伊三国同盟(一九四〇年)、大政翼賛政権の成立(一九四〇年)と、日本が太平洋戦争(一九四一年)への坂道を駆け落ちていく状況の中で、同志社の自由独立精神とユニオン神学校の自由主義的神学を身につけた鐵太郎は、日本基督教団の結成には積極的に賛成したものの、安易な妥協の産物である日本主義キリスト教にも、西欧直輸入のバルト神学を鵜呑みにすることにも同意できず、悩み苦しみながら、日本におけるキリスト教と教会の存在の意味と価値、また同志社大学における神学科の存在の意義と価値を真剣に模索していたようです。それはまた、父自身の信仰を根底から揺さぶる実存的苦悩でもありました。十五歳の時に悩んだ、「戦争は本当に愛の行為なのか？」というキリスト教への疑問は、四十歳を超えた時点でも明確な答えが見つからなかったのです。

私が自覚している最初の記憶というものは、アメリカから一時帰国していた叔母の姿で、それはスライド写真の一枚のような短いのですが、私が一歳と七か月(一九四一年)、太平洋戦争勃発の半年前のものです。しかし、父親に関する記憶は戦争が始まってからのものばかりで、母親に連れられて父の弁当を届けに行ったときに、キャンパスの中央広場のそこかしこに塹壕が掘られ、その中にいる学生たちが小銃を撃ち合っていて(もちろん空砲ですが)とても怖かったとか、せつかく神学館にたどり着いたのに、父は教職員や学生と祈祷会をしていて、母と私はドアの外で待たされたとか、あまり楽しくないものが多かったです。夕方に疲れ果てて家にたどり着いた父が玄関でドタリと

倒れ、しばらく起き上がれなかったというような、子供の私でも心を痛める出来事もありました。戦争が終わってから知ったことですが、アメリカで教育を受け多くのアメリカ人と交流のあつた父は特別高等警察（特高）の監視下におかれていたそうで、毎日が緊張の連続だったのです。特高刑事は父の授業にも出席していたので、神学を語る時にも、その言動に細心の注意を払わなければならなかったのです。

そんな父も、たまに、でしたが、私を野原に連れ出して、道端に咲いているレンゲの花をとって私の胸ポケットにさしてくれたりしました。自然と触れ合うことで自分の存在の意義を再確認していたのかもしれない。いつもは疲れ切つて神経をピリピリさせていた父でしたが、そんな優しい面も持っていたのです。

戦争が終わつても、徴兵された学生たちは傷ついた心を抱えて大学に戻つてきましたし、戦死者の中には、神学生だけでなく、自分の甥二人も含まれていましたから（その一人は当時十四歳の特攻隊志願兵でした）、キリスト者としての鐵太郎の苦悩と煩悶は以前にも増して彼の心身を痛めつづけたようで、戦争が終わつて二年経つた時に、今で言う「バーンアウト」で半年ほど、ほとんど寝たきりの生活をしていました。それでも父は、「これも神の摂理によるもので、自分の信仰と神学をもう一度根底から見直すことができた、貴重な経験だった」と、後になって話してくれました。

バーンアウトから立ち直つてから間もなく、鐵太郎は京都大学文学部キリスト教学教室担任教授に就任を要請されたのですが、「戦中戦後の混乱からまだ十分に立ち直っていない同志社大学神学部への責任があるのだ」という理由で一旦はお断りしました。それでも「君以外に適任者はいない。何年でも待つているから、その時が来たら知らせてくれ」と説得されて、翌年その招聘に応じました。

京都大学はいわゆる「世俗大学」ですから、「キリスト教について」教えることはできません、その根底にある信仰を教えること（宣教）はできません。信仰に基づかないキリスト教などというものは成り立たない、という神学者もかなりいたようですし、父自身も「神学ではなく、キリスト教について教えていても、僕の信仰は消えたわけではないから、それを学問として教えることは大きなチャレンジだよ」と言っていました。牧師を育てる神学教育から離れて、他の宗教の専門家や非宗教の学者と対話しながら、キリスト教を学問として研究し教えることに、父はキリスト者としての新しい使命を見出していたようです。

同志社大学時代には教会史、教理史を専門にしていた鐵太郎でしたが、京都大学に移ってから次第に存在論の研究に力を注ぐようになったのは、彼のキリスト教信仰が弱くなったからではなく、むしろ十五歳の時に「暗黒の中に道を見失った」ときから模索し続けて来た、神の存在、自己の存在、そして神と人、人と人との関係の意味や価値は何か、という実存的命題に対する学問的な答えをハヤトロギアの神概念（父の言葉によれば、「靜的に存在しているのではなく、『働きて有る』神」）の中に見出していったからではないか、と私は思っています。このように考えると『キリスト教思想における存在論の問題』という著書は、鐵太郎が学者として大成した一九六四年に突然発生的に生まれたものではなく、むしろ彼のそれまでの人生の集大成として、言い換えれば、彼自身の実存的意味と価値の学問的表現として書かれたものだと言えるのではないのでしょうか？『キリスト教思想における存在論の問題』がハヤトロギアの学問的表現であるとすれば、鐵太郎が死の半年前に書いた英詩「Meditation」は、ハヤトロギアの主観的表現だと言つてよいと思います。その詩の一部をご紹介します。



この私の存在が

打ち消しがたい確かさで

他者の手のうちに

置かれている——一切を

超えていながら一切の

うちにはたらしき、また一切を

無から起こし、在らしめ

それぞれの道をゆかしめる

その他者の手のうちに

この思い——それは教理でも

学説でもない

歓喜と感謝

愛と善意

希望と勇気と忍耐の

尽きない源がそこにある

父、有賀鐵太郎への想い（有賀）

この数行の中に書かれていることが、父有賀鐵太郎がその一生をかけて探し求めていたものの全てであった、と言っても言い過ぎではないと、私は思っております。お話しすることは、まだまだありますが、とりあえずこの辺りで終わらせていただき、勝村弘也君にバトンタッチいたします。ご静聴ありがとうございました。

\*有賀鐵太郎の長男有賀誠一による講演の後、司会者の勝村弘也による「有賀誠一氏への質問」があり、各項目に従って回答があった。「質問」の部分は《 》で示す。

《その一 戦中・戦後の鐵太郎の様子について、いろいろと話されたわけですが、天皇、あるいは天皇帝制については、どのように考えていたのか、疑問があります。このような問題は、家族だからといってよく分かるわけでもないと思いますが、何か感じられたことがあったら、話してください。これに関連して、鐵太郎がG H Qから新教育勅語の草案を書くようにとの依頼を受けたという話もあります。これについても何か知っておられますか。》

天皇と天皇帝制についてですが、結論からいうと、父は戦争中でも天皇崇拜者になったことはなく、また戦後に天皇帝制廃止論者になったこともありませんでした。私の記憶では、我が家には「天皇陛下万歳」とか「皇居に向かって敬礼」などという雰囲気は、戦時中でも全くありませんでした。戦争末期に我が家に設置した神棚については、小学生だった姉たちが学校で孤立してしまいそうだったことや、「お宅だけがまだ神棚を祀っておられないので、私の立つ瀬がありません。私が困るんです」という小学校の校長の懇願に負けて、「拝まなくてもいい」という暗黙の了解のもとに、一番小さい神棚を購入したそうですので、私たちが神棚に向かって祈ることはありませんでしたし、戦争が終

わると同時に白木の神棚は私の遊び道具になりました。

占領軍による第一次公職追放（皇国思想を流布した者を公職から追放）では、同志社大学の難波門吉教授（のちに神戸女学院院长）や京都大学の松村克己助教授（のちに関西学院大学教授）ら尊敬すべき先生がたが次々と、「神なる天皇」という表現を使ったというような些細な理由で大学から追放されたのですが、父は追放されませんでしたから、そのような「言いがかり」さえ見つからなかったのでしょうね。一九四六年に出版した『象徴的神学』の中で説明している鐵太郎の天皇制肯定論は、歴史神学者として日本人の精神構造、社会心理を理解した上での結論であって、天皇崇拜とは無関係であると、私は断言できます。

有賀鐵太郎が最も嫌った社会体制は天皇制でも共和制でも共産制でもなく、全体主義／独裁体制であって、一九三五年に出版した『ヘブル書注解』の総論の中で、ヒットラーのナチズムを強烈な言葉で非難していることから明らかに明らかなです。父の蔵書の中にはマルクスの資本論全巻もありましたから、もし特高に家宅搜索されていたら、ひとたまりもなかったでしょうね。今考えてもゾッとします。

実際、エリザベス女王を頭に頂く立憲君主国のカナダから、民主主義を標榜する共和制の今のアメリカ合衆国を見ていると、暗澹たる気持ちになります。ドイツは第一次世界大戦に敗戦した結果、皇帝制度からヴァイマル共和制に代わったのですが、十年後にはヒットラーの出現を見ました。昨年の大統領選挙戦でアジ演説を繰り返していたナルド・トランプのことを「まるでヒットラーの再現みたいだ」とコメントした老齢のオランダ系カナダ人がいましたが、私も全く同感でした。アメリカ民主主義も、一歩誤れば天皇制／立憲君主制よりもはるかに悪い制度になってしまいますね。アメリカで教育を受けた鐵太郎は、そのことを承知していたらしく、私が中学生の頃（朝鮮戦争の頃）

に、「一旦戦争が起ればアメリカだって大統領の独裁政権になるんだからね」と言っていたことを私は今もはっきりと覚えております。今のところ、まだ戦争に突入していないアメリカ合衆国ですが、トランプ大統領のもとで急速に全体主義／大統領独裁体制に移行していることをカナダの人たちは深く憂慮しています。

「幻の教育勅語」のことは、ずっと後になって初めて知ったのですが、その起草を父に依頼したというシエフェリンさん（占領軍所属の文官）のことはよく覚えています。シエフェリンさんとユダヤ教のチャブレンのチャブマンさんは、ほとんど毎日のように我が家にきておられました。でも、チャブマンさんの目的がなんであつたかは知りません。父が起草した新教育勅語そのものは不採用になりましたが、その趣旨は教育基本法の前文に盛り込まれたと聞いております。

《その二 戦後しばらくしてからだと思えますが、鐵太郎は「平和運動」に熱心に係わっていました。特に非暴力主義を掲げるフレンド派との関係は、よく知られています。また、このことも深い関係があると思えますが、エキユメニカル運動にも尽力されました。この運動との関係でフランスのアンドレ・トロクメとも親しかつたと聞いています。トロクメ牧師は、小さな村の指導者として多数のユダヤ人をかくまったことでも有名な方です。このあたりのことについて、記憶に残ることがあればお答えください。》

まずエキユメニカル運動（教会一致運動）から先にお答えしますと、鐵太郎は一九三六年（だつたと思います）にスイスのローザンヌで開かれたエキユメニカル会議に出席したという記録が残っています。世界教会協議会(WCC)が発足した一九四八年より十二年も前のことです。そのときにカール・バルトにも出会つたようです。一九四八年の

アムステルダムでの第一回WCC会議には出席しませんでした。一九五四年のエヴァンストン（第二回）会議にはオプザーバーとして参加し、それ以後十年近く、信仰職制委員会（Faith and Order Commission）の委員としてほとんど毎年ジュネーヴのWCC本部に出かけておりました。

WCCは教会の一致を目指しているという意味では平和志向ですが、平和運動団体ではありません。WCCが一九七九年に主催した「信仰、科学、そして未来」会議には私も出席しましたが、まだ核兵器必要論が優勢で、反対の声は小さかったと記憶しています。

鐵太郎の第二次世界大戦後の平和活動についてですが、彼は良心的兵役拒否のような「非暴力抵抗」に深い関心を持ち、FOR（Fellowship of Reconciliation）の日本支部である「日本友和会」の会長として活動しておりました。アンドレ・トロクメ牧師は戦争後、世界FORの総主事として活躍されたので、鐵太郎とも親交がありました。私はトロクメに会ったことはありませんが、父から聞いてはおりました。私自身は、ずっと後になって、人格心理学を研究していたときに、どうして二千人たらずの村人が五千人ものユダヤ人を保護できたのかを知りたくて、かつてトロクメが牧師をしていたフランス中部のLe Chambon-sur-Lignonという町を見学に行きました。深い森に囲まれた村という地理的利点はありませんが、隣村の教会は何もしなかったことを考えると、やはりトロクメの深い信仰から出た、徹底した非暴力抵抗の精神が決定的な役割を果たしたからだと確信できました。トロクメが命をかけて非暴力抵抗を訴え実践していた教会での日曜礼拝に出席して聖餐を受けたことは、私にとって忘れられない思い出です。

《その三 関連質問です。私は、何かの時に、悪しき国家権力に抵抗するためには、民衆が一定の暴力を行使するのは

当然ではないかと、しつこく訊ねたことがあります。その時に鐵太郎は、じつと眼を閉じて、「私は絶対平和主義者である」と静かに語られたことがあります。これは先ほどの話にあった国家と国家の戦争という問題とは、別の次元の事のようにも思われます。これは鐵太郎が晩年になってそのように考えるようになったということなのでしょう。これについては誠一さんの見解も交えて話して下さってもかまいません。』

戦時中の鐵太郎は同志社大学神学科の主任をしていましたので、神学科を潰そうとする軍国主義政府に対して非暴力抵抗をしておりましたが、神学科を守るためには、妥協できる限界まで妥協もしたと思います。ですから、戦後の平和運動が盛んになったときに、「戦時中の自分たちの言動を棚に上げて、『俺は戦争に反対だったのだ』とうそぶく輩が多くなったが、日本人である限り、みんな何らかの形で戦争に協力したのだから、その事実を率直に反省した上で、平和運動でなければいけない」と言っておりました。また、「前線から戻ってきた学生たちは、『敵を憎いと思わなければ敵を殺すことはできなかった』と言っていた。だから、平和を求めるものは、誰に対しても憎しみを持つてはいけないのだ」とも言いました。鐵太郎が「私は絶対平和主義者である」と言った意味は、受動的な pacifist「無抵抗主義者」という意味ではなく、「絶対に敵を憎まない非暴力抵抗主義者である」という意味だと思えます。

《その四 鐵太郎は、神学者ではパウル・ティリツヒ、エミール・ブルンナーを高く評価し、親しくしておられたようですが、何かそれに関連して思い出があれば、話してください。》

父がいつ頃からブルンナー先生と親しくなったのかはわかりませんが、バルトと違って歴史神学を重視するブルンナーに好意を寄せていたことは事実で、一度ならずブルンナーご夫妻をスイスにお訪ねしたようです。先生が亡くな

り、ご夫人も認知症が進んで「もう僕が誰かもわからなくなってしまわれた」と悲しそうに話したことを覚えています。ティリツヒとは一九三五年にニューヨークのユニオン神学校で出会ったのが最初のようですが、すでにその前から『社会主義的決断』(Sozialistische Entscheidung)まで所有していました(おそらく予約購入したのだと思いますが、これについては深井智朗博士が研究されて、私とは別の推測をしておられます)。一九六〇年にはティリツヒを京都に招いて京都大学で講演会を開き、その通訳をしました。その当時、すでにティリツヒを研究していた学者もおられました。ティリツヒは鐵太郎のことを、「Translator (通訳)ではなく、私の良き理解者、文字通りのInterpreter (解説者)だ」と称賛したということで、父は感謝感激しておりました。

《その五 初期の代表作『オリゲネス研究』では、最初に祈禱論についてかなり論じています。祈るといっても様々な形態があるので、一概には言えないのかもしれませんが、哲学者や神学者には、頭では立派なことを考えても、神に祈ることはあまりしないような人が多いのかもしれませんが。Spiritualityに関して鐵太郎から何か学んだことがありますか。》

鐵太郎は論理を重んじる学者でしたが、同時に論理では理解しきれない神への深い信仰を持った、祈りの人でした。食前の祈りを欠かしませんでしたし、よく一人だけで聖書を側において正座し、瞑想しておりました。何を瞑想していたのかはわかりませんが、きつと神様のみ声を聞こうとしていたのだと思います。大声で祈るのを聞いたことはありませんが、若い頃には清水の滝で念仏の代わりに「天に在します我らの父よ、願わくは御名を崇めさせたまえ！」

と、主の祈りを唱えながら滝に打たれたこともあったそうで、それを身振り手振りで説明してくれました。そのときにも、「神様、これでなければいけませんー」というような祈りは本当の祈りではないよ」と言っていました。

私が三十七歳で物理学をやめて神学校へ行くべきかどうか迷っていたときに父が書き送ってくれた最後の手紙に、「私も、道を見失って立ち止まったことが何度もあったが、いま振り返って見ると、くるべき道はこれしかなかったことがよくわかる。今の君も分かれ道にきているのだろう。だから、天から聞こえてくるか細い声を聞き逃さないように祈り続けなさい。Soli deo gloria」と書いてきました。

その手紙が私に届いて二日後に父は天に召されました。父から学んだ最大のもの、謙虚な、そして真剣な祈りに裏付けられた信仰者の生き方であつたと思つています。

《その六 鐵太郎は研究室では怖い先生だつたようですが、堅物ではなくユーモアの分かる人でよく冗談もいったという印象があります。テレビではよく御笑い番組を見ていたといううわさがありますが、本当でしょうか？》

有賀家がテレビを買つたのは、鐵太郎が神戸女学院の院長を辞めて京都に戻つてきた後のことで、私はもう結婚して別世帯にいましたから、彼がお笑い番組を見ていたかどうかは知りません。真面目な学者でしたが、いわゆる堅物ではありませんでした。大相撲や江戸風の古典落語は子供の頃から好きだったそうですし、英語やドイツ語のユーモアも理解し、そういう言語を使つての冗談も言いました。ただ、他人を卑下したり誹謗したりするような冗談や下品な冗談などは一切口にしませんでしたし、私にもそのことを厳しく注意してくれていました。だから堅物だと思われていたのかもしれないね。